



利根山先生

Toneyama Kojin

第99号 平成30年8月1日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花 15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808

平成30年度企画展のお知らせ

北上市所蔵 桑原イト子コレクション展

2018年9月1日(土)~11月30日(金)

故 桑原イト子氏は北上市立花出身の美術品コレクターでした。趣味で収集していた美術品を、生まれ育った古里の多くの人に見てもらいたいとの桑原氏の意向を尊重し、今回の企画展では市に寄贈された100点を超えるコレクションの中から、美術館初公開となる作品20点以上を展示します。

「若い世代に、本物の芸術作品に間近で触れてほしい」という桑原氏の願いが込められた作品を鑑賞しに美術館まで是非、足をお運びください。



宇津宮 功



松田 松雄

桑原氏のコレクション作品

心躍るセレクション



作品を選出する専任研究員

市の所蔵作品の保管庫というのがあります。薄暗い閉鎖的な空間なのですが、壁や収納ケースに立てかけられた色鮮やかな作品群を見て一瞬で心をつかまれました。

油彩画・日本画・木版画、エッチング、シルクスクリーン、リトグラフ・・・実に多種類にわたる作品群がそこに所せましと置かれていました。

どの作品がということではなく、全体から受ける印象とでもいうのでしょうか。一流が持つ品の良さで静かにせまい所蔵庫にピンとした空気を張りつめさせていました。

これでもほんの4分の1にもならないほどのコレクションということでしたので、この桑原氏の収集に対するエネルギーと、いいものを選びぬく目というものを体で感じとりました。

本館はせまい美術館なので、何をどう展示するかは大問題です。作品に囲まれこの緊張感を感じ取った以上、生半可な気持ち

ではセレクションできないな・・・という一種の使命感と、しかしながら目の前の華やかな作品一点一点を楽しむことも忘れずに慎重に、居合わせた専任研究員の会議制で選ばせていただきました。

私は見に来る人一人一人の姿を・・・というより、この桑原氏が画廊で一点一点をどういう顔で、どういう心境で、どういう価値基準で選び購入されていたのかということに思いを巡らしながら絵を手にとりました。

生活が苦しい学生支援のため、画学生の絵を買い取ったという話も聞きました。さまざまな社会運動でも活躍されたこのコレクターの計り知れない活力の源はいったい何だったのか・・・私も改めて美術館で鑑賞しながら考えてみたいと思いました。

(専任研究員)

熱心な受講生、絵画の楽しみ知り、観賞も活発に！

4月から8月まで毎月2回行われている「絵画教室」のスケッチです。

絵画初心者や油彩未経験者も多いですが、熱心に講座を受講していただいています。

はじめの課題である「石膏デッサン」は絵画の基本であり、単色(白)の像を単色(黒)の材料で表現することで、観察の仕方の基本を学びます。

次の課題は「油彩」、「水彩画」に挑戦です。初めて油彩を描く方も、絵具と格闘しながら着実に制作を進めていました。また、休憩時間に互いの作品を鑑賞し合う様子も見られました。自分の作品を他の作品と見比べることで、初めて自分の絵が客観的に理解でき、良さと課題を把握することができます。

どのような作品が出来上がるのでしょうか？気持ちのこもった個性豊かな作品が並ぶことでしょう。

出来上がった作品はおでんせプラザぐるーぶで行われる「遊・YOU学園祭」に展示します。詳細は次回号に掲載しますので、作品を鑑賞しに是非おいでください！



絵画教室の風景



～ @TONE 美～ 『ある来館者との対話より』

美術館の日常勤務の中で感じたこと、考えたことなどを「アットマークTONE美」として綴ります。

本美術館は一日の来館者は決して多くはないですが、遠くは大阪から・・・また関東近辺からの来館者の割合も思いのほか多いことに驚きます。

先日は千葉県柏市から、あるご年配の来館者の方と随分長い時間お話ししました。

駅からは自転車であつたようで、この暑い中、汗びっしょりでお疲れ様ですという感じ。常設展の東北の祭りシリーズの部屋へ入るやいなや、開口一番「いいねえエネルギーを感じるねえ！」とたいそうご満悦の様子。続いて「もっと宣伝した方がいいですよ。」とされました。

「民族の汗を感じ、生き活きとしている。」「晴れのイメージですね。」「どんな顔して描いたのかなあ・・・」「利根山の黒は、今のオフセット印刷では再現できない黒なんだよねえ。」とか・・・印象的な言葉を発して彼の利根山評は続きましたが、私にとって最も深く考えさせられたのはその後の美術館という公共施設のあり方についてでした。

「小学生なんかはこの作品の造形感覚に近い感性を持っているんじゃないかなあ。小学生の作品と利根山作品を同じ場所に並べてみるとか・・・」「美術館を維持するという発想では作品は生かされない、もっと市民の元に置いて市民に見てもらふ機会を作らないと・・・だって北上ではこんなに市民に伝統的な民族芸能が根付いているんだもの。もったいない。」

貴重な提言として受け止めたいと思いました。もちろんこういう発想で美術館も維持されてきた部分はあると思います。しかし今一度運営や施設のあり方を見直して大胆な発想で変えていかないと、確実に増えている貴重な所蔵作品は陽の目を見る機会を失うかもしれません。

わが町の公共施設が「陸の孤島化」「ガラパゴス化」しないように、市民の声に耳を傾け柔軟なアイデアを持って話し合っていければと思います。

(専任研究員)